

勝林寺寺報

ひとつところへ

わたしが中学生だった頃、兄が亡くなりました。兄は京都の大学で勉強中に、結核にかかり、田舎に帰って療養していましたが、二十二歳の秋に死んでいきました。それより以前に、私たちの母も亡くなっていました。兄は死ぬる前に、私に向かってこういいました。「わしが死んだらお母さんに会うだろうが、その時には、あんたがよろしく言っていたとつたえてやろう。」そしてまたこう言いました。「まあ、また会おうな。」これが兄が私に残した最後の言葉です。兄が亡くなつてから、もう六十年も過ぎましたが、この言葉は、兄のことを思い出したたびに、鮮明によみがえってきます。また十数年前に、父が亡くなりましたが、その遺言状を開いてみたら、「みんな元気で生きていけ、やがて浄土でまた会うことができるのを、楽しみにしている」と書いてありました。

このように「また会おう」とは真宗で大切にしている『阿弥陀経』の中に「諸上善人俱会一处」(もろもろの上善の人は、浄土の一处においてともに会うことができる)と説かれていることによるものです。その意味は、よく念仏を申して、まことの信心に生きていくものは、死んだ後、浄土に生まれて、ともに再会できるということなのです。この経文は、真宗の教えでは、とても大事な言葉として伝えられてきたものです。親鸞聖人も、その晩年に、弟子にあてた手紙の中に、「かならず、かならず、ひとつところへ参りあうべく候」と書かれています。『阿弥陀経』のこの経文にもとづいた言葉です。広島の地方

では、墓石に、この「俱会一处」と書かれたものを見るのが多くあります。このことは他の地方では見られない風景です。

私たちは、やがて遠からず死んでいかねばなりません。人の世は、いかに親しいものでも、必ず離別していくのがならいです。いまこそ、しっかりと真宗念仏の教えを学んで、肉親の死を見送るとき、また自分自身が死んでいくときに、この言葉「また会いましょう」を言いかわしながら、別れたいものです。そのことを確かにいいかわすためには、何よりも、日頃から仏法を学んでいくほかはありません。家族みんなが心をあわせて、仏法を聞いてほしいと、願うことであります。

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)



葬儀

一月二十一日

坪口 関岡つゆ子様

九十歳

祝成人

今年成人を迎えられ、大人の仲間入りをされたみなさんにお祝いの言葉とともに、歎異抄と念珠のプレゼントをお届けいたしました。これまでお育ていただいたことに感謝しながら、これからは、社会の一員として、さらに活躍の場を広げていただくことを念じます。

- 但東町小谷 官嶋成美様 (裕之様方)
- 出合 関川雄貴様 (永様方)
- 出石町坪口 中島源雅様 (孝浩様方)
- 片間 南 浩陽様 (敦浩様方)
- 川原 湯口誠吾様 (修次様方)
- 八鹿町上小田 田中怜奈様 (幸雄様方)
- 上小田 谷垣舞優香様 (久司様方)

二〇一七年度の勝林寺スタート!

一月一四日、前日からの大雪の中ではありましたが、皆さんのご協力により無事に代議員会を開催することができました。報告いたします。

二〇一七年度行事計画

- 二月 四日 仏壮総会
- 二月 一日 仏婦評議員会
- 三月 二日 伝灯奉告法要本山参拝
- 三月 二〇日 仏婦総会・春彼岸会
- 四月 八日 観桜会・グランドゴルフ大会
- 五月 五日 花祭り
- 五月 二〇日 降誕会
- 六月 一七・一八日 納骨研修旅行
- 六月 二九・三〇日 念仏奉仕団
- 七月 七・八日 永代経
- 八月 八日 戦没者追悼法要
- 八月 一九日 仏婦子ども研修会
- 九月 二三日 秋彼岸
- 十月 二一日 敬老報恩講
- 十一月 二・二三日 報恩講
- 十二月 三一日 除夜会

二月 勝林寺 予定

- 四日(土) 勝林寺 仏壮総会
- 一日(土) 勝林寺 仏婦評議員会
- 一日(水) 岸下きよみ宅 七回忌
- 一九日(日) 官嶋大樹宅 一周忌
- 二六日(日) 出石組連研 補修
- 二六日(日) みのりを聞く会

(敬称略)



「目はみずからを見ず」

目はみずからを見ず。

お釈迦様から七百年の後に南インドに生まれ、お釈迦様の教えを集大成した竜樹菩薩という方が、その著述『中論』の中でおっしゃっていることばです。竜樹菩薩は、八宗の祖師といわれるほどの大学者です。すべてのことを知りつくし見通すほどの目を持っておられた人で、それだけに、優れたよく見える目の盲点を、自分でいつでも警戒しておられたのでしよう。

「なんじ自身を知れ」ということばを、みずからのいましめとしていたというソクラテスという大学者も、学問すればするほど、偉くなればなるほど、自分の本来の姿を見失いがちになつてしまふ自分自身を、いつも警戒していたのでしよう。

高く登れば登るほど、私たちは高いところからのすばらしいながめばかりに気をとられてしまします。ついつい自分の足元のおぼつかない危なっかしさを忘れているときがしばしばあります。

「目はみずからを見ず。」
学問をした、道徳を積んだ、仏や神を信仰した。そこからの見晴らしはさぞすばらしいでしょう。だが、足元をすくわれたらたいへんです。蓮如上人様も「行先、向こうばかり見て、足元を見ねば踏みたがうぞかし・・・」と仰せになつています。どんなときにも、私自身が見える目を、持ちたいものです。

信心のよろこび



「心配ばかりかけ通しです。ときには気ままに反抗さえする私です。そんな私なのに、母は毎朝あたたかいお弁当を作ってくれるのです。」と、美しい涙をうかべながら母を話してく

れた女子高生がいました。その高校生の母はまたいうのです。

「いいえ、もう私には親らしいことは一つもできやしません。勉強を見てやることはもちろん解してやれなくなりました。子どもはもう、私なんか飛び越えて、大きくなつてくれています。情けない親です。申し訳ない母親です。」

親と子とのほんとうのつながりというものは、こういうかたちでこそ育つのではないのでしょうか。孝行していますという子どもと、子どものために一生懸命尽くしていますと主張する親との間には、むしろ反発反抗しか生まれてこないのではないのでしょうか。

「貴む(とうとむ)より 貴がる人ぞ 貴かりける」
信心や信仰によつて如来さまをつかみ取ろうと懸命に努力する人がいます。貴いことには違ひありません。けれども蓮如上人は、それは丁度、信心信仰というザルで水をすくい取ろうとするのと同じだと申されます。今日、私の信心の中に、如来さまをつかみ取れたと思つても、明日ははや私のザルの中は空っぽになつてはいませんか。今日私の信仰の中でのよろこびでも、明日は、ありがたいことももつたないこともなくなつてはいませんか。

蓮如さまは、そんなザルのような私であるのなら、いっそ、そのザルごと、水の中にどっぷりつけてみたらどうだろうかとおっしゃるのです。このザルのような私にこそ、すでに呼びかけていてくださる如来さまがあるのだと、気づかせていただけたらとおっしゃるのです。

「貴む(とうとむ)より 貴がる人ぞ 貴かりける」信心のよろこび、如来との出逢いのよろこびは、むしろそんなところにこそあるのではないのでしょうか。

(前住職「テレホン法話」第一集より)

法語カレンダー二月五日より一部抜粋

如来すなわち涅槃なり
涅槃を仏性と名づけたり

お浄土に咲き乱れる色とりどりの蓮の花。皆さま、よくご存じの『仏説阿彌陀經』には、池のなかの蓮華は、大きさ車輪のごとし。青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、白色には白光ありて、微妙香潔なり。『註釈版聖典』(一二三頁)

とあつて、車輪のように大きないろんな色の蓮が美しく輝き、その香りは気高く清らかだとあります。しかし何でしょうか。この「青い花は青い光を」といつて繰り返される、同じ花の色とその光。一見すると、当たり前のこと言っているようにしか見えないのですが、当たり前ではないんです。その花が、青という色をもつのなら、青く花咲くそのままが、限らない尊厳を輝き放つていますよ、と教えているのです。私たちのように、自分とは違う色をうらやみ、憧れ、でも、少しも変わつていけない自分に、苦しんでいく必要はまったくないというのです。

これはお浄土の風景を描写しつつ、実は、仏さまの視野を教えてください。ということばは、それはそのまま私たちがお浄土に生まれた時に眼前にひろがる、豊かな風景だということもできましよう。

今月のご和讃をすべて示せば、次のとおりです。如来すなわち涅槃なり 涅槃を仏性と名づけたり 凡地にしてはさとられず 安養にいたりて証すべし(『註釈版聖典』五七三頁)

如来さまとは、燃え盛る煩惱の炎を完全に消し切つた、極めてこころ安らかな「涅槃」という領域におられます。しかしそれと同時に、そこに居座ることなく、私たちのもとに、さとり

の世界(如来)から来現される涅槃の体現者(如来)です。(後略) 井上 見淳

どすん
新しい年が始まつて、はや一か月が過ぎました。少し時が経ちましたが、年末年始の勝林寺の様子を報告します。二月二十七日に行つたお餅つきには、悪天候の中、若男女約二十名の方が参加してくださいました。今年、仏僧役員さんのお孫さんも参加してくださいました。場が一気になごみ、華やき、にぎやかになりました。報恩講にお供えしていただいたモチ米で、全部で十臼ついでいただきました。お餅餅はもちろん、豆餅やよもぎ餅もつきました。きなこ餅、しょうゆ餅、おろし餅で、つきたてのお餅をその場でいただくのも、うちのお餅つきの醍醐味です。丸めたお餅は、お手伝いいただいたみなさんにもおすそ分けします。臼と杵で丁寧についたお餅は、とつても美味しいです。

三十一日の除夜会は、雪も雨も降らずとても穏やかな夜となりました。今年、みかんを百八個用意して皆さんをお待ちしました。二十秒に一回鐘を撞いてもらい、お礼にみかんを渡すのは、次男の入海の役目です。向拝でのみなさんへの振る舞いは、お酒、甘酒、ぜんざい、カレー雑煮、みそ雑煮。ノロウイルスの心配から、今年、焼きガキの振る舞いは中止となつてしまいました残念でした。豆餅やよもぎ餅も焼いて食べていただき、好評でした。

本堂では、まず、十一時から二十八年最後の正信偈のお勤めをします。除夜の鐘をみんなで撞いた後は、再び本堂に戻り、二十九年最初の重誓偈のお勤めをします。みんな新年のご挨拶をした後、住職の法話を聴聞しました。あとは、本堂で、向拝で、焚火のそばで、新年を迎えた喜びを分かち合います。阿彌陀様の見守つてくださる中で、新しい年のスタートを切つたのです。今年もたくさんのお参りの方で埋まる本堂であり続けますように。(文責 坊守)

新しい年が始まつて、はや一か月が過ぎました。少し時が経ちましたが、年末年始の勝林寺の様子を報告します。二月二十七日に行つたお餅つきには、悪天候の中、若男女約二十名の方が参加してくださいました。今年、仏僧役員さんのお孫さんも参加してくださいました。場が一気になごみ、華やき、にぎやかになりました。報恩講にお供えしていただいたモチ米で、全部で十臼ついでいただきました。お餅餅はもちろん、豆餅やよもぎ餅もつきました。きなこ餅、しょうゆ餅、おろし餅で、つきたてのお餅をその場でいただくのも、うちのお餅つきの醍醐味です。丸めたお餅は、お手伝いいただいたみなさんにもおすそ分けします。臼と杵で丁寧についたお餅は、とつても美味しいです。

三十一日の除夜会は、雪も雨も降らずとても穏やかな夜となりました。今年、みかんを百八個用意して皆さんをお待ちしました。二十秒に一回鐘を撞いてもらい、お礼にみかんを渡すのは、次男の入海の役目です。向拝でのみなさんへの振る舞いは、お酒、甘酒、ぜんざい、カレー雑煮、みそ雑煮。ノロウイルスの心配から、今年、焼きガキの振る舞いは中止となつてしまいました残念でした。豆餅やよもぎ餅も焼いて食べていただき、好評でした。

本堂では、まず、十一時から二十八年最後の正信偈のお勤めをします。除夜の鐘をみんなで撞いた後は、再び本堂に戻り、二十九年最初の重誓偈のお勤めをします。みんな新年のご挨拶をした後、住職の法話を聴聞しました。あとは、本堂で、向拝で、焚火のそばで、新年を迎えた喜びを分かち合います。阿彌陀様の見守つてくださる中で、新しい年のスタートを切つたのです。今年もたくさんのお参りの方で埋まる本堂であり続けますように。(文責 坊守)